

目的 明治初期から昭和前期(第2次世界大戦前まで)に到る学童の衣生活の変遷とその背景について調査した。対象を高知県とし、高知市及び香美郡香北町と物部村一帯の山閉部の学童の服装と第2報の浦和市と比較、対照しながら特徴、差異などを考察した。

方法 各地域の小学校の卒業写真、クラス写真、開校百年記念誌、教育史、地方史、また古写真の聞きとり調査などによった。

結果 高知地方には明治期の男子の服装に「紺不袴、紺袴、筒袖」の制服様式の服装が見られた。これは浦和市や、その他の地方では見られなかったものである。要因としては篇末の工作を覆った尚武の風潮が、明治期になつても影響を留めていたものと思われる。また、昭和前期の洋装への移行状況にはかなりの時間的ずれも見うけられた。中央からは遠く隔絶された高知県で、早い時期から洋装化が始まったのに対して、東京近郊の浦和市では逆に遅い。これは地理的、歴史的環境から形成された住民の気風の差によるものと考えられる。また、女子の髪型については、浦和市や他の地方でも大正期に多く結かれた辮児髷が、高知県では明治30年代に消滅したものと考えられる。これらのことから、服装の変遷過程については、その地域の経済や交通事情とは別に、人びとの志向の差が形の上に影響を及ぼすことが分つた。